

平成27年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第2年次）（概要）

1 研究開発課題				
5年一貫教育の特徴を生かした、看護専門職者を育成するための先進的なプログラムの研究開発～「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」と「生涯学び続ける力」を育てるために～				
2 研究の概要				
<p>「専門職」と呼ばれる職業人にとって『実践能力』と『研究能力』は、必須の能力であるにとらえられている。高度化する医療に対応しうる看護実践能力と研究能力を備えた人材を育成することは、「看護専門職者」を養成する本校の使命である。</p> <p>今回の研究では、広い視野に立った看護観を育てることを目指した「豊かな人間性」、臨床に即した看護実践能力を育てることを目指した「確かな知識・技術」、看護の探求、研究的態度を養うことを目指した「科学的な思考・判断力」の育成を3つの柱とし、さらにこの3つを総括した「生涯学び続ける力」を育て、社会の第一線で活躍できる専門的職業人を育成することを目的としている。そのために、これまでの教育活動を見直し、これらの力が身につくようなプログラム開発を行うことを目標とする。この研究を成功させるため、全教員が連携し、社会の要請に応えられる専門職の育成を目指し、評価・修正しながら研究を進めていく。</p>				
3 平成27年度実施規模				
【豊かな人間性】				
「花を育てる活動」 高校1年生（全員）を対象として実施				
「夏休みボランティア活動体験」 高校1年生～専攻科1年生（全員）を対象として実施				
「復興支援ボランティアスタディツアー」 高校3年生（10名）、専攻科1年生（4名）、専攻科2年生（1名）を対象として実施				
「ライフステージからみた生命倫理に関する授業」 専攻科1、2年生（全員）を対象として実施				
【確かな知識・技術】				
「デジタルコンテンツを用いたe-ラーニングによる授業」 高校1年生～専攻科1年生（全員）を対象として実施				
「病院・企業との連携による授業」 高校1～3年生（全員）を対象として実施				
【科学的思考判断力】				
「実験的要素を含んだ学習体験」 高校1～3年生（全員）を対象として実施				
「大学との連携による専門性の高い学習」 高校1～3年生（全員）を対象として実施				
「看護研究方法」 高校3年生～専攻科1年生（全員）を対象として実施				
【生涯学び続ける力】				
「ポートフォリオの活用」 高校1年生～3年生(全員)を対象として実施				
「プロジェクト学習」 高校1年生～専攻科1年生（全員）を対象として実施				
4 研究内容				
○研究計画				
1) 豊かな人間性				
	花を育てる活動	夏休み ボランティア活動体験 (復興支援ボランティアスタディツアー)	倫理に関する授業	人間関係論
1年次 (H26)	花壇づくりをすることで、協力、責任感、連携など人との関係やチームの一員としての立場を考えた行動をとることができる。	地域で行われている活動を知る。年代の異なる人とのかわりの中で相手を思いやる心や奉仕の心を育てる。自分の経験を他者に伝える		

	看護職者として常に自覚と責任をもって行動する態度の基礎を養う。	ことができる。		
2年次 (H27)		ボランティア活動体験を通して、他者を尊重する事の大切さや、自分の果たせる役割について考えることができる。 看護での学びを生かした活動について考えることができる。		
3年次 (H28)		看護での学びを生かしたボランティア活動体験を行う。 周囲の状況を判断し、その場に合わせた行動をとることができる。		
4年次 (H29)		看護での学びを生かしたボランティア活動体験を行う。 これまでの経験をもとに、自分なりの看護観を持つ。	人生各期において生命倫理における課題や問題点があることを理解する。	信頼関係を構築するためのコミュニケーションに関する基礎的な知識と技術を習得させる。
5年次 (H30)			臨地実習において、これまでに身につけた、倫理観や看護観に基づいた看護を实践する。	精神面を充実し、看護の職業に従事する者として、人間関係を円滑に保つためのコミュニケーションを实践する。

2) 確かな知識・技術

	デジタルコンテンツを用いた e-ラーニングによる授業	病院・企業との連携による授業
1年次 (H26)	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用し、基礎的な知識・技術を身につけることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	
2年次 (H27)	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用するとともに、臨地実習時に患者のケアに役立てることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	病院実習のイメージがつき、不安を軽減できる。 認定看護師等の講座を通して、患者が療養生活を送る中で、医療事故の発生を回避するための知識・技術をイメージすることができる。併せて生徒自身の危険性を予測し、感染や放射線曝露から身を守るすることができる。
3年次 (H28)	基礎看護の予習復習にナースィングスキルを活用する。また、臨地実習を通して、受け持ち患者の状況に応じた援助を考えることができる。 タブレットを利用して看護技術を振り返ることができる。	専門家による講座を受け、これまでの知識を関連づけ臨地（病院・災害時）をイメージするとともに、専攻科での専門家による授業への準備を進める。
4年次 (H29)	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考えることができる。	高校までの知識・技術を土台に臨地（災害時）の様子を具体的にイメージすることができる。
5年次 (H30)	シミュレーション教育等により、多重課題の状況に応じた患者をイメージし、課題を発見し、最善の解決方法や手技を考え、実施し評価することができる。	

3) 科学的思考・判断力

	実験的要素を含んだ学習体験	大学との連携による専門性の高い学習	看護研究方法
1年次 (H26)	看護に関連した学びを通して、科学的根拠（エビデンス）の大切さがわかる。	「基礎看護」に関連した専門性の高い講座を受講し、実験手法やデータ収集の実際を経験する。	
2年次 (H27)	授業を通して感じた「疑問」を出発点にして、看護に関連した実験的要素を含んだ学習体験を通して、看護技術の根拠を確かめる。	「栄養」に関連した専門性の高い講座を受講し、実験手法やデータ収集の実際を経験し、正確なデータ収集ができる。	文献検索の方法がわかり、CiNii 等を利用して、初歩的な文献検索ができる。 初歩的なデータ処理ができる。

3年次 (H28)	高校2年生での経験を発展させ、「研究の問い」を意識したテーマを設定して、実験的な要素を含んだ学習を体験する。	「薬理」に関連した専門性の高い講座を受講し、実験手法やデータ収集の実際を経験し、正確なデータ収集ができる。	設定したテーマにそって文献検索やクリティックを経験する。
4年次 (H29)	文献検索を十分に行い、「食後の血糖上昇実験」を通して、得られたデータを分析することができる。		研究論文を読んで、評価の視点にそって考えることができる。文献検索を行い、事例研究を進めることができる。統計学を学び、基本的な統計処理ができる。
5年次 (H30)			研究計画書に基づいて本格的に看護研究に取り組み、論文としてまとめ、発表することができる。

4) 生涯学び続ける力

	ポートフォリオの活用	プロジェクト学習
1年次 (H26)	パーソナルポートフォリオを作成し、自分が力を入れて取り組んだことを可視化することで、自己肯定感を向上させる。	活動に記載の取組を実践することにより、「イメージする力」「課題発見力」「課題解決力」「コミュニケーション力」「プレゼンテーション力」の5つの力を前年度よりも向上させる。
2年次 (H27)		
3年次 (H28)	パーソナルポートフォリオをキャリアポートフォリオにして継続させ、看護、医療に関する新聞・雑誌などの記事や書籍のリスト等を資料化し、自分が目指す看護像について意識啓発を図る。	
4年次 (H29)		
5年次 (H30)		

○教育課程上の特例（該当ある場合のみ）

特になし

○平成27年度の教育課程の内容（平成27年度教育課程表を含めること）

別紙参照

○具体的な研究事項・活動内容

1. 「豊かな人間性」を育てる活動

a. 花を育てる活動（高校1年生）

「豊かな人間性」を育てる取組として、SPHの象徴である花壇で花を育てる活動を高校1年生が行っている。隣接するさいたま桜高等学園生産技術科の生徒の協力を得ながら花を種から育て、水やりや草取りを行い、花壇の整備を行った。チームの一員としての責任感、協調性、連帯感、あるいは花を美しいと感じる感性など、生徒の心・感性に何らかの変容がもたらされることを期待し実施した。文化祭の際には、花壇のテーマを看板として作成し、掲示した。テーマは生徒から募集した「夢をのせて」である。

b. 夏休みボランティア活動体験（高校1年生～専攻科1年生）

高校1年生から専攻科1年生の全員が、夏休みに1人1日以上のボランティア活動体験を行った。これらの活動のねらいは、地域で行われている活動を知ること、「相手の話を聞き、それをふまえて自分の意見を伝える」というコミュニケーション力を養うこと、異年齢との交流を通して、礼節を学ぶことや、相手の立場に立って考える豊かな人間性を養うことである。生徒のこれまでの活動の経験をもとに、継続性のあるボランティア活動体験ができることを期待し、事前に前年度の活動の振り返りを行った。さらに情報共有の場を持ち、他の生徒の活動の様子を聞く機会を持った。この情報共有をもとに、自分の活動を決定し、自ら地域で行われている活動の情報を得て、活動先に連絡し申し込みを行った。活動後には報告書を作成する。夏休み明けにその報告書をもとにLHRの時間を活用して、体験を共有する機会を持った。報告書は文化祭で展示し、全校生徒や来客の方に紹介した。

・復興支援ボランティアスタディツアー（高校3年生、専攻科1年生の希望者）

震災直後より被災地を訪問している聖学院大学と連携し、夏休みの8月6日～9日の4日間、宮城県仙台市、岩手県釜石市を訪問し、ボランティアスタディツアーを実施した。今年は、聖学院高校の生徒も参加した。昨年からの継続として「常盤ならではのボランティア活動を提案するプロジェクト」を立ち上げ、活動のテーマである「自分で感じる」→「考えを深める」→「みんなに広げる」の2年目の活動として取り組んだ。校内の活動だけではなく、聖学院大学の大学生によるプロジェクトリーダー会議に企画の段階

から参加し、釜石の方々のニーズを把握し、それに合わせて常盤高校生が自分たちができることを考えて実施した。訪問の後には、活動から学んだことや、今後の活動へ向けた報告書を作成し、校内のみならず地域での報告や他の活動団体との交流を行った。

c. ライフステージからみた生命倫理に関する授業（専攻科1、2年生）

看護科目の各領域の中で生命倫理を扱う単元において、一斉講義の授業形態から、生徒が主体的に考えることを促す指導方法への転換を図るため、個々の教員レベルで授業改善を行った。今年度は、各領域で生徒が「倫理的なジレンマ」を感じられるようなテーマを設定して授業を行い、授業終了後には教員間で、授業に関する情報を共有する事を目標に実施した。さらに、生徒の反応を知るために、共通のアンケート、感想の用紙を作成した。

専攻科における今年度からの取組であり、次年度へ向けて各領域での関連性を持たせるために、生命倫理に関する単元の配置を整理し、学習に系統性をもたらすシラバスの在り方を検討する。

また、看護師としての看護観育成の基礎を作る事を目的として、看護と共通するテーマに関する他職種の専門家による講義を聖学院大学に依頼し実施した。

日程	時間	対象学年	講師名	テーマ
3月7日(月)	専1限	専攻科1年(合同)	長谷川恵美子	ストレス対策とうつ予防
3月7日(月)	専2限	専攻科1年(合同)	中谷 茂一	子ども虐待とネグレクト
3月7日(月)	専3限	専攻科1年(合同)	古谷野 亘	高齢社会の元気高齢者に関すること

※専1～4限は1コマ90分

d. 人間関係論の講義における演習の充実（専攻科1年生）

対人関係を苦手とする生徒が増えている傾向にあることから、特別非常勤講師と連携し、当該講師の担当授業「人間関係論」の中で人間の理解を深め、対人関係を円滑にすることで、コミュニケーション力の向上をねらいとする演習を導入した。専攻科における今年度からの取組であり、今年度の結果をふまえて他の活動との関連づけを行っていく。

日程	時間	対象学年	講師名	テーマ
10月14日(水)	専1,2限	専攻科1年(合同)	湯浅俊夫	看護の現場の困難を乗り越えるコツ (菅原田鶴子先生)
10月22日(木)	専1,2限	専攻科1年(合同)	湯浅俊夫	カウンセリング技法の基礎 (中村恵子先生)

※専1～4限は1コマ90分

2. 「確かな知識・技術」を育てる活動

a. デジタルコンテンツを用いたeラーニングによる授業の開発（高校1年生～専攻科2年生）

デジタルコンテンツ「ナーシングスキル」による予習を前提とした授業を展開し、自ら根拠を考えて看護技術を身につける習慣化を図るようにした。ICTを授業の中に取り入れ、生徒のICT活用能力向上を図ることをねらいとし実践した。タブレットを用いて即時に調べることで理解を深めたり、動画を撮影し実技を自分で確認するなど活用の機会が増えた。これらを活用することで、生徒は、自分のペースで予習や復習を行えるようになった。生徒アンケートにより、今年度の課題であった、デジタルコンテンツの内容と本校の授業内容との違いによる生徒のとまどいについては、デジタルコンテンツの動画を差し替え、既成のコンテンツを本校の授業や教科書に合わせた内容に改編し、本校用にカスタマイズすることで解消した。また、生徒の演習の様子をアップロードして実技の振り返りに活用したり、授業中のデモンストレーションの様子をアップロードして、演習のイメージづくりに活用した。

また、ICTを活用した協調学習や、シミュレーション教育の導入など、アクティブラーニングを取り入れるために、教員のスキルアップのための研修を行い、指導法の開発を行った。初めての取組については教員間でアドバイスをしながら教材研究を進めたり、お互いの授業を見学に行く機会が増え、学年を超えて情報交換をする機会が増えた。これまでの学習法との置き換えや、関連性について検討し、教育内容の充実を図っている。

・OSCEによる技術評価（高校3年生：基礎看護、統合実技試験）

本校では、専攻科へ進級するにあたり看護科3年生に統合実技演習を実施している。内容は「点滴施行中の患者の寝衣交換」で、点滴管理と寝衣交換という複合技術の習得を目的としていた。本年度は、近年

看護教育でも注目されている看護OSCEを取り入れ、判断力・技術力・マナーなど実際の現場で必要とされる臨床技能の習得を意識した試験になるよう取り組んだ。OSCEは、実技テストの合否を決めるものではなく、自己学習の促進と実践力の育成を主目的として、フィードバックを重要視している。看護OSCEの評価表（患者役評価表、教員評価表、自己評価表の3種類）を作成し、2月に実施予定である。

b. 病院・企業との連携による授業の開発（高校2年生～専攻科1年生）

これまで専攻科だけで実施していた外部講師による授業を、高校2年生から学習進度や目標に合わせて導入した。導入にあたっては、講座の前後には校内の教員が授業の導入やまとめを行い、日ごろの授業との関連付けができるようにした。

高校2年生では、基礎看護の単元「安全を守る技術」内に、専門家による「医療現場における感染管理」と「放射線曝露からの防御」の講座を位置づけて企画し、実施した。

高校3年生では、基礎看護に「フィジカルアセスメント入門講座」、成人看護では単元「がん看護」内に2講座を実施した。フィジカルアセスメントは専攻科1年生で授業展開をしているが、臨地実習でも活用することの多い「聴診法（呼吸器）」の技術習得を目指した。呼吸音を正しく聴取しアセスメントにつなげられるよう、また臨床でのバイタルサイン測定をイメージできるよう専門家による講座を企画し、実施した。また「がんと看護」では、がんの治療を受けながら生活している患者をイメージできること、放射線療法の基礎知識を習得することをねらいとし、企画し実施した。

日時	対象学年	講師の所属	講師名	テーマ
10月15日（木） 高校2～4限	看護科2年 （クラス毎）	埼玉医科大学総合 医療センター	池田知子	医療現場における感染管理
10月16日（金） 高校2～4限	看護科2年 （クラス毎）	埼玉医科大学総合 医療センター	池田知子	医療現場における感染管理
10月6日（火） 高校3、4限	看護科2年 （合同）	群馬県立県民健康 科学大学	石倉准	放射線の基礎知識、放射線曝露からの 防御
10月6日（火） 看護科5、6限	看護科3年 （合同）	群馬県立県民健康 科学大学	石倉准	放射線治療について
10月20日（火） 高校3～6限	看護科3年 （クラス毎）	埼玉医科大学総合 医療センター	関口絢香	フィジカルアセスメント （聴診法）
12月21日（月） 高校5、6限	看護科3年 （合同）	埼玉県立がんセン ター	横枕令子	がん看護

※高校1～6限は、1コマ50分

3. 「科学的思考・判断力」を育てる活動

a. 実験的要素を含んだ学習体験（高校1年生～専攻科1年生）

看護を实践する上で必要不可欠な科学的根拠について、生徒の疑問や仮説にもとづいてデータを取り、科学的に考察する力を育てることを目標にしている。計器を用いて数値を測定したり、観察機器を用いて可視化したりする経験を通して、看護実践上の原則について論理的に科学的根拠を理解できるようにする。また、自ら仮説をたてて実験的要素を含んだ学習体験をすることで、得られたデータをもとに「考えてみる」経験を通し、科学的思考力を伸長したいと考えている。学年進行とともに、授業を通して感じた「疑問」を出発点とし、文献検索後、テーマを設定してデータを取り、仮説の検証を試みるなど、より高度な科学的・論理的な問題解決思考の育成を進めた。SPHにおける各取組を有機的に繋げていくために、テーマ設定や手法を検討しながら進めた。

・ナーシングアートプロジェクト（高校2年生）

高校2年生が、「私たちが見つけたエビデンスに基づいた看護技術の提案集を作る」ことを目標として、自分たちが疑問を持った「看護技術の根拠」について実験をして確かめ、エビデンスに基づいた看護技術を提案するというプロジェクトを行った。授業は、約半年間をかけて「基礎看護」の時間を中心に実施した。明らかにしたいテーマをもとにチームを作り活動した。まずは文献を調べ、根拠を明らかにしていくための資料を集め、それに基づいて実験の計画を立てた。文献検索は「看護情報活用」の時間と連携し実施した。実験で得られた結果をもとにして、もう一度文献を確認し、結果を分析しエビデンスを確認した。その結果に基づいて、看護技術の提案をした。

b. 大学との連携による専門性の高い学習（高校1年生～高校3年生）

「看護」に関連した授業の一環として、大学と連携し、大学の施設・設備・実験機器を使用して、大学の指導者による専門性の高い実験・実習講座を受講する機会を作った。高校1年生では「基礎看護」に関連した内容、高校2年生は「栄養」に関連した内容、高校3年生は「薬理」に関連した内容で計画し、実施した。また、一部の生徒を対象に、授業外で「細菌培養実験講座」や「血圧変動実験講座」を実施した。

日時	対象学年	講師の所属	指導者名	テーマ
7月23日（木） （放課後）	高校1～3年 （希望者）	日本薬科大学	斎藤 博	細菌培養実験講座 「身のまわりの細菌を見てみよう」
7月25日（土） （週休日）				
8月28日（金） （夏季休業中）	高校2年14名 （血圧チーム メンバー）	女子栄養大学	山下俊一郎	血圧変動実験講座 「運動や寒冷刺激が血圧に及ぼす影響について」
9月18日（金）	高校3年 （全員）	日本薬科大学	土肥敏博	「薬効に影響する因子を基にしたテーラード薬物療法」
			佐藤卓美	「クスリの作用・副作用、相互作用の基本的な考え方」
			斎藤 博	薬理学実験講座 「アルコールの体内代謝」
			山路誠一 糸数七重	漢方・薬用植物講座／植物園見学 「薬用植物・生薬と医薬品」
9月29日（火）	高校2年 （全員）	女子栄養大学	五明紀春	塩の働きと過剰摂取について
			上西一弘	「思春期のダイエットの弊害」 体脂肪率、骨密度測定
11月27日（金） 高校5、6限	高校1年 （全員）	埼玉県立大学	高久 悟	「口腔の健康から全身の健康へ」

※高校1～6限は、1コマ50分

c. 看護研究方法の学習（高校2年生～3年生）

高校2年生「看護情報活用」の授業の中で、文献検索の基礎、データ処理の基礎、統計処理の基礎やプレゼンテーションの手法等を学習内容に取り入れ、昨年同様実施した。高校3年生では、「成人看護」の授業の一環として、家族の基礎血圧や家庭の味噌汁の塩分濃度を測定してデータ化し、体格（肥満度）、運動習慣・飲酒習慣・喫煙習慣等との関連性を、Excelで処理し、分析する演習を行った。また、「基礎看護」の授業の中に『SPH看護研究講座』を設定して、各自のテーマにそって文献検索やクリティークを経験させ、さらに「看護研究計画書」の作成も経験させた。

専攻科1年生を対象に従来から実施していた「血糖上昇実験」は、事前に文献検索やクリティークをさせ、実験結果を予測させてから臨ませた。「研究方法」に関する大学との連携講座を実施する計画であったが、実現しなかった。

4. 「生涯学び続ける力」を育てる活動

a. ポートフォリオの活用（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生には、入学前の説明会でこれまでの自分の成長を振り返り、自分の努力したことを可視化するツールとしてパーソナルポートフォリオを紹介し、入学までに実際に作成し、それをクラスメートへの自己紹介に用いた。高校2、3年生においても、前年度の自分の成長と感じたことや努力したことを加えたパーソナルポートフォリオをクラス替え後の自己紹介ツールとして活用した。高校3年生はそのパーソナルポートフォリオを活用し、自分の過去・現在から未来を考える「夢をかなえようプロジェクト」を行い、将来の目標を見通し、専攻科進級時や、卒業時、卒業後までに、その目標を達成するためにどのような力を身につけている必要があるのかをリサーチし、将来像の目標を明確にした。そして、それらをキャリアポートフォリオとして発展させ、専攻科生徒との交流会の際に活用した。

b. プロジェクト学習（高校1年生～専攻科2年生）

高校1年生が4月に、鈴木敏恵先生より「プロジェクト学習」に関するオリエンテーションを受け、4月～7月にチームプロジェクトとして、「常盤高校生に役立つ防災マニュアルを提案します！」を行った。防災に関する課題は、初めて意識する内容ではないため、身近であるが、場所や人の状況設定により、リアル感のある課題を発見し、解決策を提案することとなり、プロジェクト学習の思考過程とリアルな提案をプレゼンテーションする力をつけた。7月～翌年2月にかけて、本校教員が主となり、鈴木先生のアドバイスを受けながら、マイプロジェクトとして「大切な人の健康を守る方法を提案します！」を実施した。マイプロジェクトのプレゼンテーションは、高校2年生とも交流し、地域、病院関係、保護者に公開した。高校2年生は、授業で学んだことで疑問に思ったことを実験で確かめ、「エビデンスに基づいた看護技術を提案するプロジェクト」をプロジェクト学習の手法を用いてまとめを行った。

授業だけでなく校内の活動においても、高校1年生で身につけた「プロジェクト学習」の手法を用いて様々な活動を行った。校内の教員でも研修や情報共有を行い、授業や学校活動の中でプロジェクト学習が行われ始めている。「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」を相互に関連づけた12のプロジェクトを実施した。

番号	分類	活動の場面	プロジェクト（テーマ）	今年度の成果
1	個人	高校1年	入学時パーソナルポートフォリオ作成	常盤高校に入学するまでの自分の歴史を振り返り紹介ツールとして活用した。
2	チーム	高校1年	大切な人を守りながら行動する防災プロジェクト	情報収集のための動きがあり、可視化しやすく、入学早々にチーム力があがった。
3	個人	高校1年 基礎看護	大切な人の健康を守るプロジェクト	個人プロジェクトとして教員の指導が定着してきた。
4	チーム	高校1年 基礎看護	技術コンテスト	チームで取り組み、知識・技術の定着を主体的に図ることができた。
5	チーム	高校2年 基礎看護 情報活用	私たちが見つけたエビデンスに基づいた看護技術の提案	自分たちで実験した結果を分析し、エビデンスに基づいた看護技術を提案。臨地実習後に再構築し、再度提案。実験計画に対し、教員のスキル不足・指導力不足が課題である。
6	チーム	高校2年 基礎看護	技術コンテスト	高校1年生に実施したコンテストの内容に観察・アセスメントの視点を追加した。
7	個人	高校3年生 精神保健	夢をかなえるプロジェクト	キャリアポートフォリオ(自分のヒストリー・常盤高校で身についた力・何をを目指す)作成し、専攻科1年生との交流会で使用した。
8	個人	高校3年生 基礎看護	看護技術試験	自分の技術を動画で客観視し、向上を図った。
9	チーム	専攻科1年生	専攻科1年を乗り切るプロジェクト	夏季休業中から3か月の目標管理ができた。
10	チーム	専攻科1年生	実技試験に合格する	技術の動画を撮り、スライドショーで提案した。ナーシングスキルにUP予定。
11	チーム	専攻科2年生	国家試験に受かる	チームで授業をした。
12	チーム	復興支援ボランティア スタディーツアー	常盤ならではの活動を提案するプロジェクト（高校3年生、専攻科1年生の希望者）	聖学院の大学生と企画の段階から一緒に考え現地にニーズに合わせた活動を提案。コミュニケーション・防災意識の大切さに気付いた。

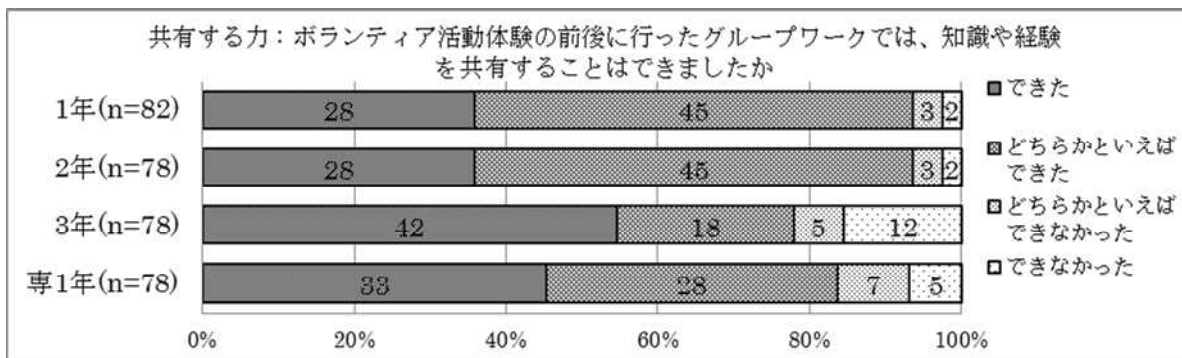
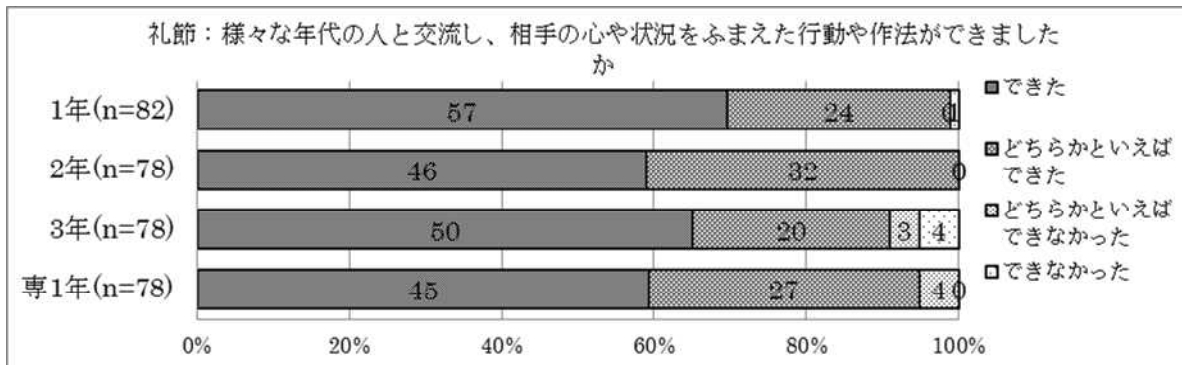
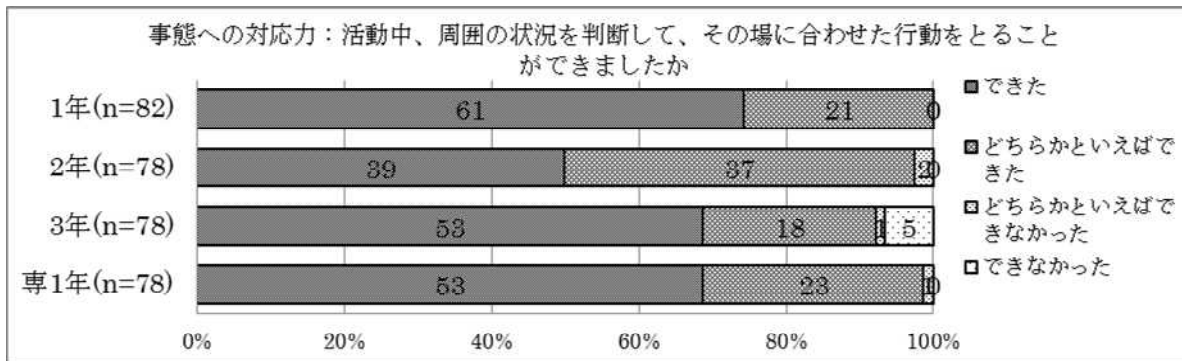
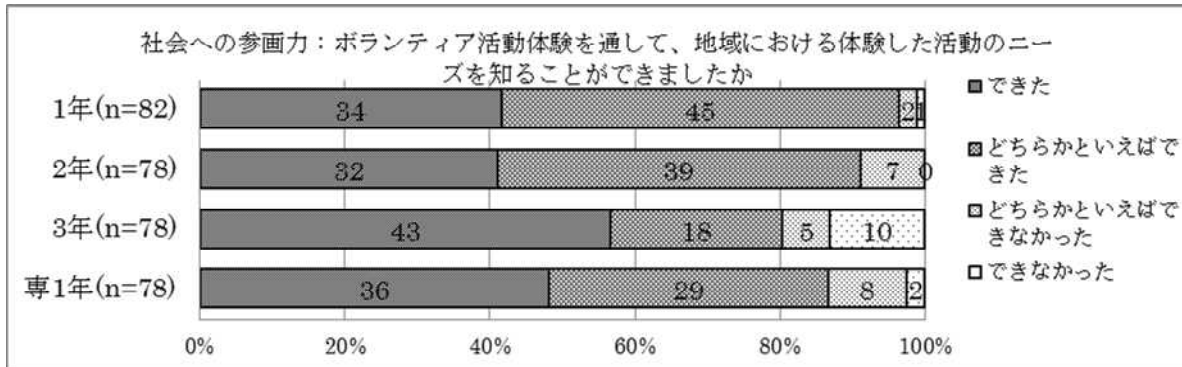
5 研究の成果と課題

○実施による効果とその評価

各活動後の生徒アンケートは、文科省による「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール事業における共通的な評価指標」と常盤高校で設定した「身につけさせたい力（評価の視点）」にもとづいて作成した。SPH活動全体を通してのアンケート調査は年度末にSPHで身についた力（プロジェクト学習で身につく力；鈴木敏恵）として実施し、ターゲット学年である平成26年度入学生の推移を継続的に分析していく予定である。今回は、暫定的な指標である各活動後のアンケート結果（結果は各活動ページで報告済み）を本校の評価の視点で抜粋し、今年度の総括とする。

1. 「豊かな人間性」を育てるために、身につけさせたい力

a. ボランティア活動体験

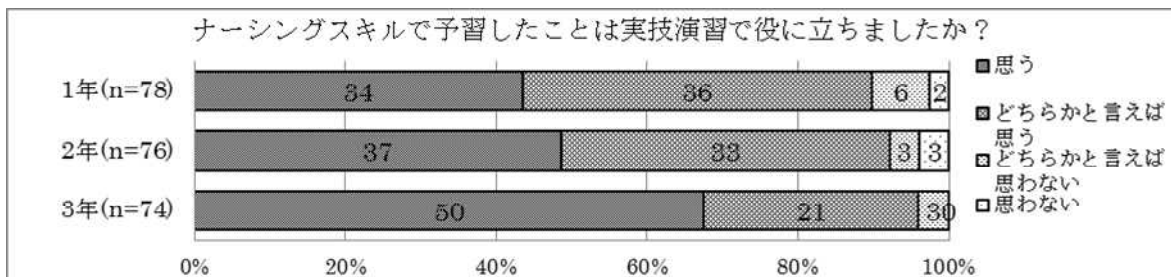
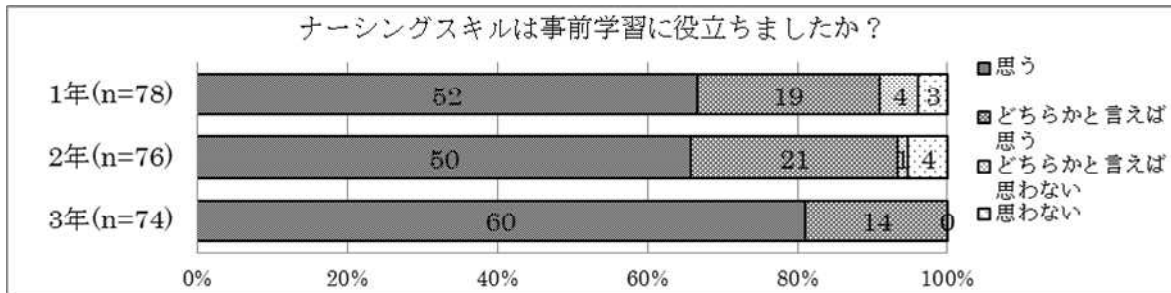


夏休みボランティア活動体験で、育てたいと考えていた「社会への参画力」「事態への対応力」「礼節」「共有する力」は、目標値である80%以上の生徒が「できた」「どちらかといえばできた」と回答し、力が身についたととらえている事が分かる。復興支援ボランティアスタディツアーに参加した生徒では、「社会への参画力」では100%ではなかったが、他の4項目では100%が身についたと回答していた。活動内容の変化を見ても、人と関わる活動が増えており、事前事後の情報共有による一定の効果がみられている。アンケートの結果より地域の活動を知る、異年齢の人と接する、コミュニケーション力を高める活動が概ねできていると考える。年齢の離れた人と接し、地域の活動を実際に体験することは学校の中では経験することができず、貴重な学びの機会となっていると考える。又、限られた時間の中での経

験のため、他者の経験を共有することにも意義があると考え。今後は活動の幅を広げることを目的として、「夏休み地域活動体験」の名称を変更し、活動を継続していく。

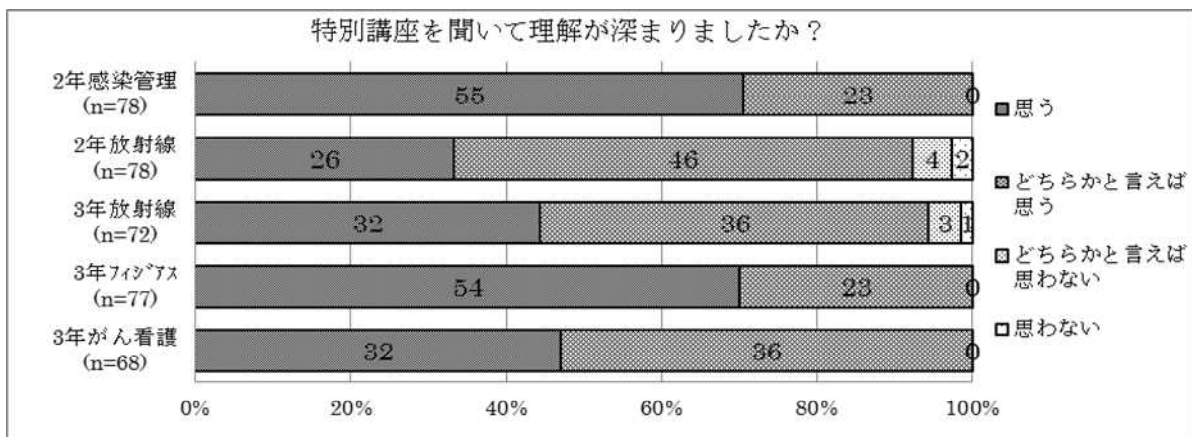
2. 「確かな知識・技術」を育てるために、身につけさせたい力

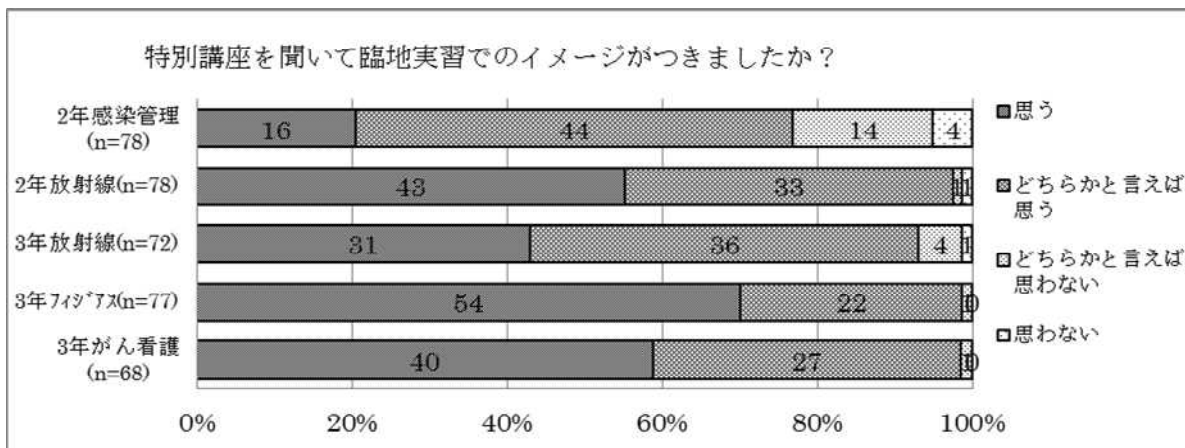
・ナーシングスキルは役に立ちましたか



高校1～3年生のすべての学年において、90%以上の生徒がナーシングスキルを有益に活用している。常盤独自の動画を各学年で作成したが、80%以上の生徒が学習に役だったと回答している。特に、3年生はタブレットを使い自分たちの援助技術の動画をアップしており、多くの生徒が、自分の技術を振り返り、他者の技術を見ることで実技演習で役立てることができたと答えている。教員も生徒の技術が向上していると感じており、自宅で自分のペースで主体的に学ぶことができるデジタルコンテンツは有用であると考えられる。タブレットは実技のイメージ化を促し、これらを活用した学習が生徒の定着しつつある。

・専門家による特別講座



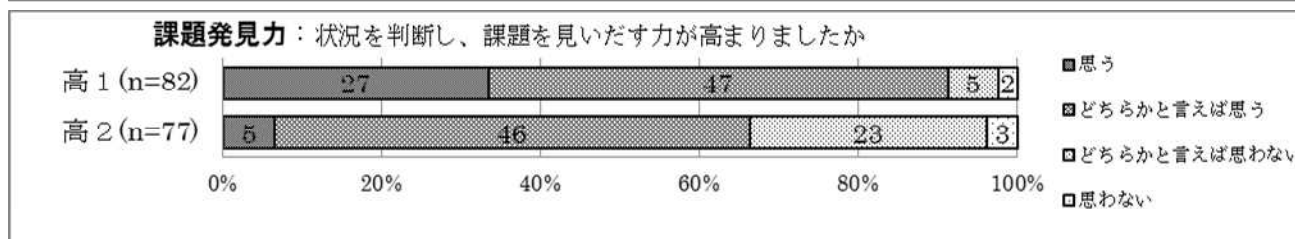
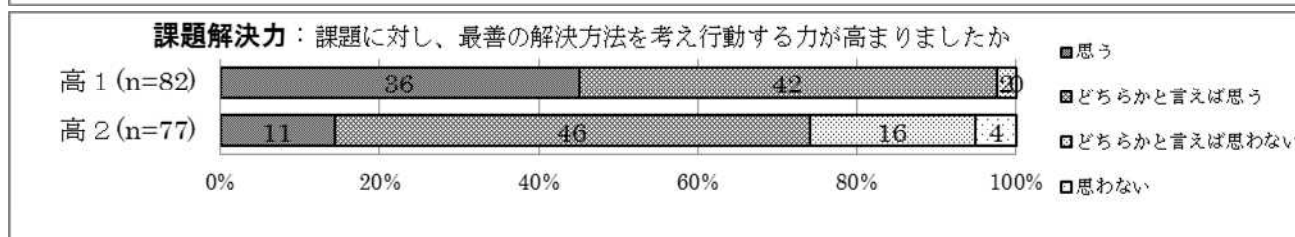
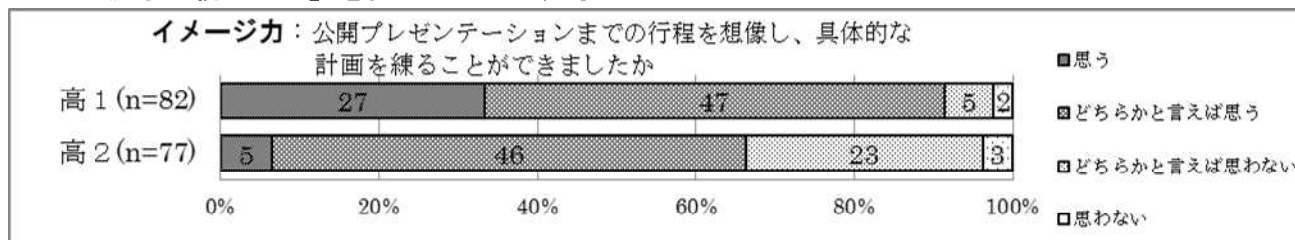


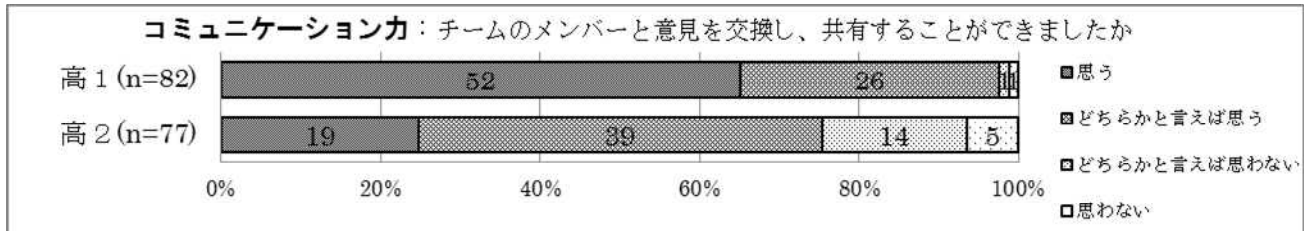
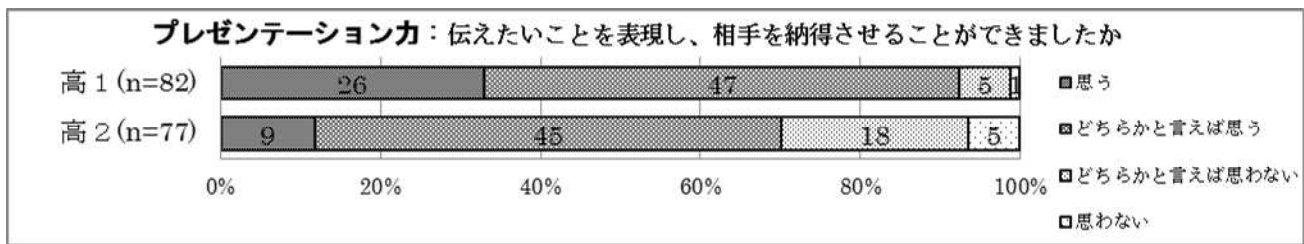
専門家による授業では、目標値の100%に満たないものもあるが、ほとんどの講座で理解が深まり、臨地実習でのイメージがついたという回答が得られている。感染管理の講座において、100%の生徒が「理解が深まっていたが、23.1%の生徒が「臨地実習でのイメージがつかなかった」と回答している。この講座では、感染制御の視点から環境整備をするという演習が行われた。高校2年生が環境整備について学習したのは、高校1年生の5月であった。このことが、環境整備の基本が想起しにくく、演習での「とまどい」を生じさせたのではないだろうか。この後に実施した、同じ場面を用いた「転倒転落の演習」では、自由記述の感想であるが「感染」と「転倒予防」の視点からの環境整備の重要性についての記述が見られている。今後も、既習事項と特別講座の関連づけ、その後の学習への継続性を持たせるための工夫をしていく。

3. 「科学的思考・判断力」を育てるために、身につけさせたい力

高校2年生の「ナースングアートプロジェクト」は、プロジェクト学習として行ったため、「生涯学び続ける力」で評価する。看護研究については、高校3年生で現在進行中であり、評価は3月末に実施する。

4. 「生涯学び続ける力」を育てるために、身につけさせたい力





上記の5つの力において高校1年生は「思う」「そう思う」と回答している生徒が、90%以上である。高校1年生は防災というテーマが身近で、これまでの経験からイメージしやすいことから、このような結果が得られたと考えられる。高校2年生においては、目標値である80%を超えている項目がみられない。高校2年生のプロジェクト学習では、文献検索や実験でのデータ収集を伴っており、またその結果を分析し自分たちでエビデンスを確認して看護技術を提案するという、初めて経験する要素が多く含まれていた。これらの経験から、難しさを感じ、自分を厳しく自己評価した結果とも考えられる。しかし、取組や内容は生徒なりに考えた提案であり、成長の感じられるものであった。そのため、生徒ができていることに対するポジティブなコーチングにより自己評価を高めることも今後求められると考える。今後も継続して観察していく。

5. 文部科学省「SPH事業における共通的な評価指標」にもとづくアンケート結果

学年	特別講座	評価の観点			
		授業や実習等に積極的に取り組むことができ、学ぶ意欲が高まった	課題に対して解決方法を自分で考え、行動する力が高まった	学びを通じて、新たな知識・技術を習得することができ、自分のスキルアップにつながった	自分の将来の職業（看護職）に対する意識が高まった
1年	(科学的思考・判断力) 口腔ケア	97%	81%	96%	96%
2年	(科学的思考・判断力) 栄養学	94%	86%	95%	88%
	(確かな知識・技術) 医療現場における感染管理	99%	97%	97%	99%
	(確かな知識・技術) 放射線曝露からの防御	88%	92%	86%	94%
3年	(科学的思考・判断力) 薬理学	94%	77%	95%	85%
	(確かな知識・技術) 放射線療法	94%	88%	92%	81%
	(確かな知識・技術) フィジカルアセスメント	100%	97%	99%	92%
	(確かな知識・技術) がん看護	100%	93%	100%	87%
専1	(豊かな人間性) 人間関係論	95%	87%	94%	81%

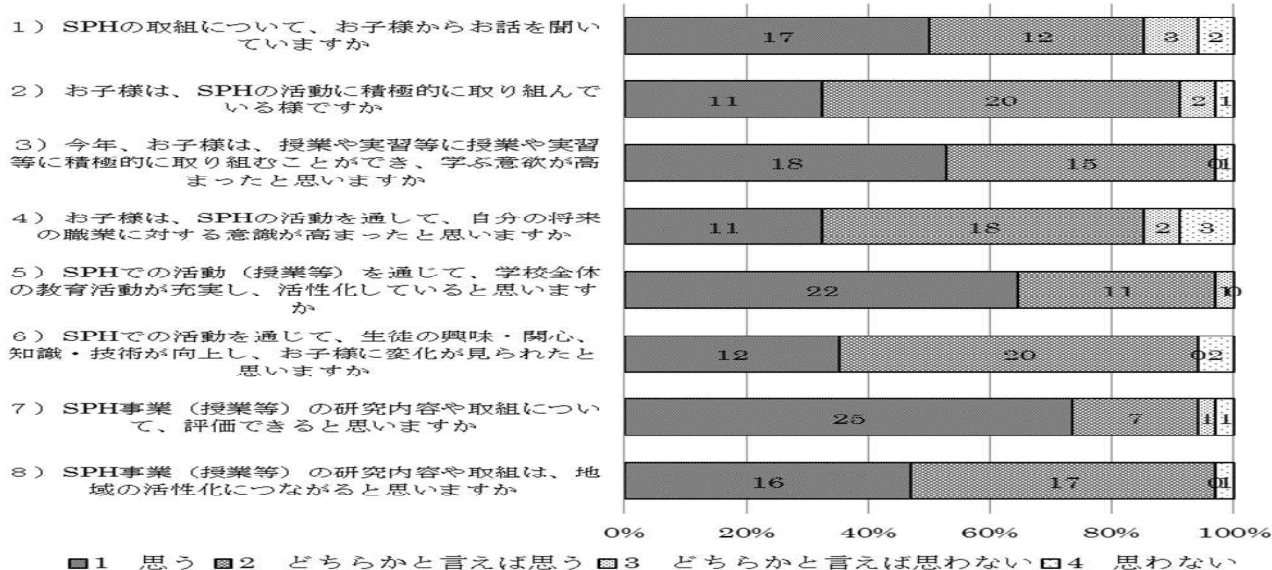
「豊かな人間性」「確かな知識・技術」「科学的思考・判断力」の特別講座において、文部科学省による「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール事業における共通的な評価指標」をもとに、それぞれの講座ごとにアンケートを実施した結果である。この結果を見ると、全体に学ぶ意欲が高まり、知識・技術の習得についての自覚は高い。しかし、解決方法を考え行動するまでには至っていないと考えている生徒がやや多いことが見えてきた。これらの講座は、職業意識を高める役割を果たしているといえる。

6. 全体を通して

2年目の取組として、計画した企画は、ほぼ計画通り実施することができた。生徒もSPHの活動を

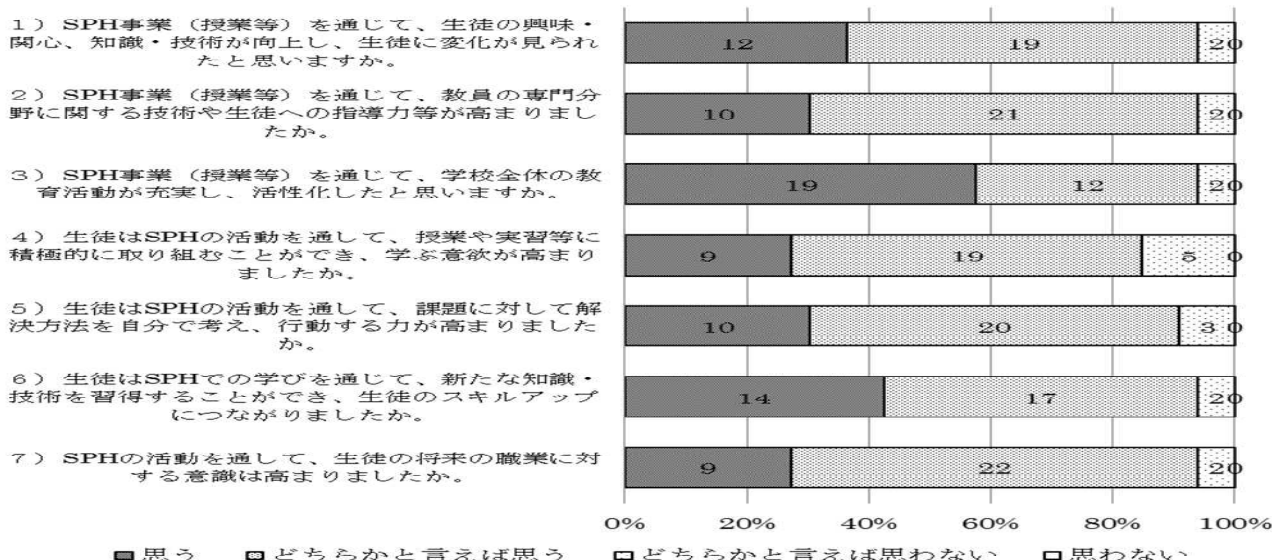
意識し、前向きに取り組む姿勢が見られ、生徒達のアンケートの結果からもその成果を生徒も実感していることがうかがえる。その生徒の反応が、PTAアンケートの結果からも、その成果が保護者などにも伝わっているものとする。また、校内の教員の中にもSPHが浸透し、各々の教育活動の中にSPHの目指すところが徐々に意識されてきている。年に4回、学校行事に組み込むことにより時間を確保して始まった各チーム会は、全職員が集まりとても有効な話し合いの場となった。また、今年は職員研修として「常盤高校が考える豊かな人間性」をテーマにワークショップを行った。教員アンケートの結果から、校内にプラスの変化が起こっていることが読み取れ、今後更なる活動の深化が期待できる。また、一つ一つの活動は、様々な教科や他の研究チームと関連していることが見え始めている。今後は、それらを統合した先進的なプログラムを開発し、全国に発信していきたい。

PTAアンケート(n=34)



■1 思う ■2 どちらかと言えば思う ■3 どちらかと言えば思わない □4 思わない

教員アンケート(対象：教員 n=33)



■1 思う ■2 どちらかと言えば思う ■3 どちらかと言えば思わない □4 思わない

○実施上の問題点と今後の課題

- ・今年度の課題：「災害看護」に関しては、今年度実施できなかったが次年度の実施へ向けて準備を進めている。また、今年度は定性評価には至らなかったが、次年度には分析を進めていく予定である。
- ・時間の確保：様々な活動が実施されており、打合せ時間を多く要するようになってきている。効率的な会議の運営と時間の確保を図っていく。
- ・シラバス上の位置づけ：実践したものを、カリキュラムに位置づけ、教育内容の充実を図る。

